復興事業にともなう発掘調査に対する奈良文化財研究所の取り組み２

東日本大震災の被災各地では、復興事業にともなう多数の発掘調査がおこなわれ、全国の地方公共団体から派遣された多くの埋蔵文化財専門職員の方々がその支援にあたっています。奈良文化財研究所としても、派遣要請が出された場合、その内容に応じて即座に職員を派遣する体制を整えています。今年度上半期には、福島県広野町や宮城県気仙沼市に職員を派遣し、発掘調査やその後の出土遺物等の整理報告についての支援をおこないました。この様子については、49号に記しています。

この取組の一環として、2013年11月から2014年1月のおよそ3カ月間、福島県南相馬市の椴木沢（もみのきさわ）C遺跡および横手古墳群の発掘調査支援のため、数名の研究員を交代で派遣しました。前者は古代の製鉄炉や木炭窯等を含む製鉄遺跡、後者は古墳時代の円墳でともに記録保存対象の遺跡です。それぞれで遺構の検出、記録作業をおこない、3Dレーザー測量等遺構記録の効率化をはかる技術も導入しました。

日頃奈良で調査しているわれわれの多くは、東北地方での発掘は未経験でしたが、地元の調査員の方々と協力しながら調査をおこないました。様々な組織に属する専門職員が一緒に調査をおこなうことは、現在の特殊な状況下でのことではありますが、多くの「目」で遺跡を見つめ議論することで、調査をより効率的に進めることができたと思います。

被災地の復興事業はむしろこれからが本番です。今後も奈文研による支援事業を継続していく予定です。

（都城発掘調査部　芝 康次郎）

椴木沢Ｃ遺跡での調査の様子

遼寧省文物考古研究所との共同研究

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、2013年11月に遼寧省瀋陽市の遼寧省文物考古研究所並びに朝陽市と北票市で、遼西地域東晋十六国期都城文化関連の遺跡・遺物を調査しました。今回は11月23日から30日までの8日間、遺物の調査とともに三官営子（さんかんえいし）遺跡を踏査しました。調査者は、計4名でした。

今回の調査対象は、遼寧省文物考古研究所等によって北票市で発掘調査された、金嶺寺遺跡出土瓦および大板営子（だいばんえいし）遺跡出土金属製品です。これらの遺跡は慕容鮮卑（ぼようせんぴ）族の活動した三燕時期にあたり、3世紀から4世紀にかけてのもので、日本の古墳時代に相当します。瓦は、軒丸瓦を主体に全体で60件余りを調査しました。遺物の熟覧・調書作成、拓本・実測、撮影等、考古学的調査が主体でした。製作技法について新知見がいくつかあきらかになってきています。大板営子遺跡出土金属には、金・銀・銅・鉄製品が含まれていますが、鉄製品には錆のために形の不明瞭なものもあります。そのため、まず、それらの種類を見極める基礎的な作業が必要です。また、日本と中国で製品名の異なるものもあり、それを確認することも不可欠です。そのため、今回の調査では、出土品一覧表の作成から始めました。その一覧表が完成したので、今後はこれに基づいて様々な調査を実施する予定です。金属製品についても一部、熟覧、実測、撮影等をおこないました。

これらの調査に加えて、今年度3月の調査計画や来年度の共同研究計画について、遼寧省文物考古研究所の李新全書記らと、協議をおこないました。

（都城発掘調査部　小池 伸彦）

遼寧省文物考古研究所での出土品調査の様子